平成12年度行事案内

歴史資料館では平成12年度に次のような行事を開催します。各展覧会の内容と各種講座の募集については随時市報その他でお知らせします。多くの方のご来館・ご参加をお待ちしております。

秋の特別展

豊後国の眺め－古代の役所とくらし

会期　平成12年10月27日～11月26日

数年前、大分市上野ヶ丘で古代から中世の国府関連施設と考えられる遺構が見つかり、豊後国府所在地論争に一石を投じました。また、市内各所で古代の遺跡が多数発掘調査されています。

この展覧会では豊後国府関連施設やその他の遺跡そして、これらと比較するために平城京や大宰府、鴻臚館など中央政府の施設からの出土品を展示します。その中で、律令制度や官人たちの生活ぶりについて、また豊後国の状況などを紹介します。

テーマ展示

Ⅰ．府内藩と豊後鶴崎
会期　平成12年４月29日～６月25日

Ⅱ．西洋文明との出会いと交流
会期　平成12年７月８日～９月24日

Ⅲ．古絵図の世界－描かれた江戸時代の大分
会期　平成12年12月２日～平成13年１月28日

Ⅳ．市内発掘情報Ⅱ
会期　平成13年２月３日～３月31日

各種講座

■ふるさとの歴史再発見

①歴史のコース　平成12年４月～６月（計９回）
②考古のコース　平成12年７月～９月（計９回）
③民俗のコース　平成12年11月～12月（計６回）
④古文書のコース　平成13年１月～３月（計９回）

日時　毎月１・２・３土曜日　14時～15時30分
対象　高校生以上　定員　70名　受講料　無料

■ジュニア歴史講座

期間　８月上旬（４日間）
対象　小・中学生
内容　本物の資料に触って、体験しながら歴史を学ぶ講座です。

■映像でつづる歴史への旅・ミュージアムシアター

日時　毎月第４日曜日
11時・13時・15時の３回上映
内容　日本の歴史や文化を紹介する映画やビデオを上映します。

大給氏家紋入り印籠
（テーマ展Ⅰ）

児島高徳騎馬図
（テーマ展Ⅰ）

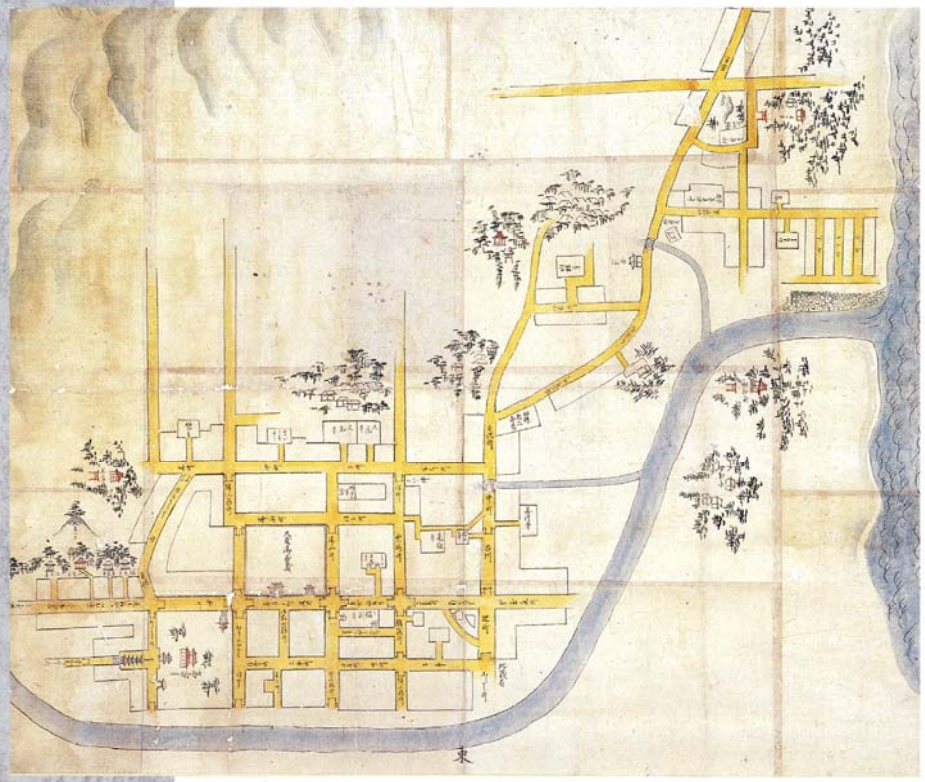
竹中村絵図（テーマ展Ⅲ）

編集後記

今年は400年ぶりの特異なうるう年ということで、２月29日が第２のコンピュータ2000年問題と騒がれました。若干の誤作動はあったようですが、年越し同様大きな支障はなく過ぎ去りました。でも、400年ぶりと言えば、現在のグレゴリオ暦となって（1582年採用）２度目の出来事であり、ほとんどの国が初めて経験する特異年なのですから、大騒ぎもあたりまえだったのかもしれません。（H.O）

資料館ニュース　No.50
発行　2000.３.31
大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の１
〒870-0864 ☎(097)549－0880

大分市
歴史資料館ニュース
OITA CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS



府内古図（資料館蔵）

50
2000.３.31

府　内　古　図

歴史資料館は、郷土史家故立川輝信氏の遺族から寄贈された府内古図２点を所蔵しています。１点は高山英明元大分市長写の牧在氏写絵図（Ｃ類）と同類絵図で、もう１点は今まで知られていた古図とかなり感じの違う古図でした。しかし、詳細に検討すると以前A類、B類、C類の三種に分類した内のB類に相当することが判りました。（分類は「府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報1993年度』に基づいています。）A類は、現段階で最古と推定される市内旧家蔵古図で『大分市史　中巻』（昭和62年）に写真が掲載されています。府内古図の原典または原典に近いと考えられる古図です。料紙、色彩、描写など何れをとってもＢ・Ｃ類より優れています。Ｂ類はＡ類の情報を粗く踏襲しており、文字絵図情報はＣ類よりＡ類に類似しています。Ｃ類は絵、文字情報ともＡ類とはかなり差があり、写図者の考証が書き込まれています。

府内古図はその内容から大友時代府内の様子を江戸時代に描いた絵図と考えられていますが、その信憑性については研究者から疑問視されてきました。しかし故渡辺澄夫先生の「伊勢参宮帳」にみえる町名の比較研究や、発掘調査の結果からその信憑性は高まってきています。古図の成立年代は江戸時代初期と推定され、幕末の府内藩学者阿部淡斎は日根野吉明時代に描かれたと推定しています。現在までの資料では一番妥当な見解と思われます。

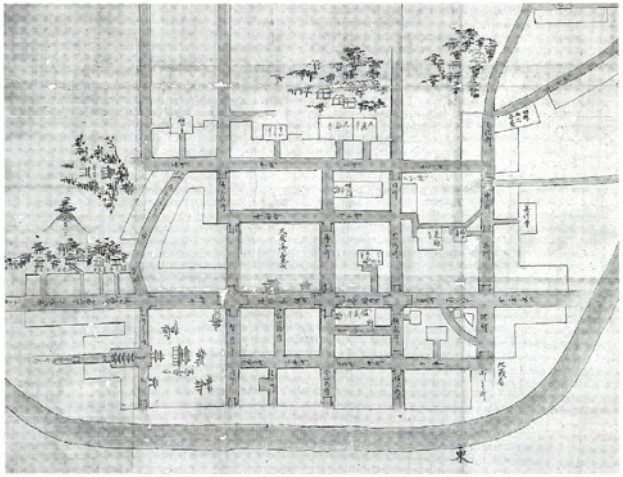
館蔵Ｃ類古図は既に写真を掲載していますので、今回はこのＢ類古図を紹介しましょう。

従来知られていたＢ類古図は後藤碩田が天保５年写図を天保14年（1843）に補正写図した古図（日名子太郎旧蔵）です。その古図は現在所在を確認できませんが、写真やさらにそれを写した図が残っています。今回紹介する当館蔵の古図をB類とすれば、原図・写図・写真を含めて２種４点確認されます。

古図は日名子旧蔵の後藤碩田写図に比較して一見同類とは見えませんが、文字情報や、基本的な街路の描き方などが共通しています。

共通している点を列挙すると、A類にあり、B類にも見られるがC類に継承されない点は、大友館の門が東に面し礼門と通用門が並列してある点、いわゆる“蔵場”に名称がない点、その蔵場の南東隅が凹んでいる点、称名寺には東と南に門が描かれている点があります。A類の名称が変化しているものには、大友館→大友御屋敷（鋪）、大臣塔→大臣塚、比丘尼寺→尼寺があり、これらはC類古図に継承されます。

本図と、碩田写図の前後関係は、本図の情報が碩田写図と比較してよりA類に近いので、型式学的には本図の方が古いと思われます。しかし、絵図に情報の洩れがある点（A・B・C類ともにある長浜社西側の堀割が抜けています）と、道路端を画一的に延長して、絵図を実態から離れたものにしている点など他の古図と異なった点が認められます。しかし、現在所在を確認できる数少ない府内古図として貴重な絵図といえます。



府内古図・部分

大分の先人－賀来飛霞・後藤碩田・滝廉太郎－

本テーマ展示では、賀来飛霞（1816－1894）・後藤碩田（1805－1882）・滝廉太郎（1879－1903）の、大分ゆかりの三人の先覚者について、その足跡や、優れた業績の一端を紹介いたしました。ここでは、この中の一人、賀来飛霞について紹介しましょう。

飛霞（通称を睦三郎、または睦之といい、飛霞はその号）は、文化13年（1816）に医者、賀来有軒の３男として国東郡高田（現豊後高田市）に生まれました。５歳のとき、父の友人であった日出藩の帆足万里（1778－1852）の門に入り、13歳まで医学を学びました。その間、本草学の研究に必要な絵の手ほどきを杵築藩の画人、十市石谷（1793－1853）に受けています。天保５年（1834）、18歳のとき、異母兄の佐之（飛霞とともに帆足万里に医学を学び、その後、長崎へ行き、吉雄権之助に蘭学を、またシーボルトから本草学・蘭方医術を学んでいます）に連れられて京都へ行き、本草学者の山本亡洋（1778－1859）に師事。これを機に本格的に本草学の研究を行うようになりました。天保11年に兄佐之と由布岳において初めての採薬を行い、その成果を「由布嶽採薬図譜」・「由布嶽採薬記」に著しました。また、同13年には、杵築藩士の江戸行に同行し、途中木曽路を廻り、さらに奥羽、北陸を歩き、千数百の植物の採取と写生を行っています。天保14年には、前年に島原藩の藩医として赴任した兄佐之の跡を継いで、郷里の佐田村（大分県安心院）で医業にも携わりました。弘化２年（1845）に延岡藩から招かれて「高千穂採薬記」（本書は、幕末日向地方の庶民の衣食住や、生業、宗教などの貴重な記録としても知られています）を著し、嘉永４年（1851）には、その前年に西日本一帯を襲った飢饉に対し、山野の植物の調理方法等を記した「救荒本草略説」なども著しています。

明治11年、東京大学理学部員外教授であった伊藤圭介（1803－1901）の招きで上京し、東京大学小石川植物園取調係として勤務。同14年には、圭介とともに、優れた画質や印刷水準から世界の植物研究者の注目するところとなった『東京大学小石川植物園草木図説』第１冊を出版しています。翌年には東京植物学会（のちの日本植物学会）の創設にも関わりました。明治19年に東京大学が東京帝国大学と改称されたのを機に職を辞し、同21年に帰郷。その後は、「百花山荘」と名づけた自宅で余生を送り、明治27年３月10日、78歳で亡くなっています。

飛霞の描いた植物図は、花弁や種子の構造、葉脈や幹・根の形態にいたるまで詳細に観察され図示されており、近代的な植物学の視点を具えたものとして高い評価が与えられています。本コーナーでは、こうした飛霞の動植物図18点のほか、東京大学奉職中に執筆に関わった「救荒植物集説」を展示しました。

ムカゴソウの一種と楊梅の図（飛霞筆）

ニハトコホダツ図（飛霞筆）

賀来飛霞植物図鑑

本ページでは、当館が所蔵する賀来飛霞の植物図と、
「救荒植物集説」に書かれた内容をあわせて、
「植物図鑑」風に構成してみました。

ホド ■豆科　○ホドイモ　フド　紀州　ツチグリ　江州
●漢名　土圞児　◎洋名　アピヲスフォルチュネイ
諸国山野ニアリ、蔓生ニシテ、葉ハ翼状ニ五小葉ヲ着ケ、根ハ長クシテ蔓延シ、処々ニ円塊連珠ヲナス、烹テ食ヒ、又煨シ食フ、味、野山薬（ジネヒジョウ）ニ似タリ

キキョウ（図右端）　通名　■桔梗科
○阿里乃布岐　和名鈔　アリノヒアフギ　手加止止岐　本草和名
ヒトヘグサ　古歌　キチカウ　仏吉草　和方書　クワンサウ　信州
セイネイ　江州　一重草　ムケカシ　北海道
●漢名　桔梗　◎洋名　ブラチコドングランヂフロールム
山野向陽ノ地ニ自生ス、人家ニモ多ク、栽エテ花ヲ賞ス、七月花ヲ開ク、弁五裂、其ノ色鮮紫、所謂桔梗色ナリ、其ノ他、単重千葉花形ノ差別、色ノ濃淡等ニ数種アリ、又、淡黄色ノモノモアリ、此ノ根ハ漢医日用ノ薬品トス、又、嫩苗ヲ煮、食ヒ、根ヲ漬物トスヘシ、朝鮮ニテモ此ノ根ヲ専ラ食用トスト云フ

マテバシヒ ■穀斗科　○マテバカシ　サツマシイ
◎洋名　ケルクスグラブラ
此樹、葉形櫧ニ似テ、亦、いぬぐすノ如ク厚クシテ長大ナリ、実形モ亦相似テ長ク、褐色ニシテ殻厚シ、生ニシテモ食フベシ、炙リ食ヘハ味最佳ナリ、又、一種、九州ニ多ク産スルモノハ、葉形、柯（シヒ）ニ似テ短ク、実ハ櫧ニ似テ円アリ、底凹ミ、色黒褐ニシテ殻厚ク、椽椀（ワン）児残シ、方言しりふかト呼フ、亦、炙リ食フヘシ

救荒植物集説

本書は、飢饉に際して食用として利用が可能な植物（総数123種）について、科名・方言・漢名・洋名、色、形態の特徴、植生、調理方法などを記したもので、明治17年に「文部省報告官報」として刊行された同名書の下書き、もしくはその写しとみられます。表紙に「伊藤圭介述、賀来飛霞筆」とあり、序文によると、伊藤圭介が自著「救荒食物便覧」（天保７年著）や実験をもとに、諸書を参考にしながら、「賀来飛霞ノ増補ヲも加へ」て、明治17年（1884）にまとめ著したと書かれています。豊前・豊後の方言が多く記入されていることや、当時伊藤圭介が82歳の高齢であったことなどから、同書執筆において飛霞が深く関わっていたと考えられます。

タニワタシ ■豆科　○ナンテンハギ　尾州　アツキナ　豆、濃、木曽
フタバハギ、クサナンテン、クツハヅル　江州
●漢名　歪頭菜　◎洋名　ラチルスメツセルシミヂイ
諸国山中ニ自生多シ、宿根ヨリ斜ニ叢生シ、毎節短梗ヲ出シ、二葉ツツ並着ク、形、南天燭ノ一小葉ニ似タリ、故ニ「ナンテンハギ」ノ名アリ、其ノ本末リタル小托葉アリ、夏至ノ後ヨリ托葉ノ間ニ細梗ヲ出シ、紫色ノ蛾形花ヲ綴ル、此ノ嫩葉ヲ食用トナス、又一種、細葉ノモノアリ、「フヂカヘリウ」ト呼フ

資料紹介

転并類族之書出

「転并類族之書出」（以下「書出」と省略）は貞享４年（1687）12月、臼杵藩の武士吉水藤右衛門が藩の役所へ提出した書類の写しか下書きと思われます。ここには藤右衛門の祖父を中心にした親族17名の名前と所属している寺院、死亡している場合はその年月日と死因が書き上げられています。それは彼の祖父藤右衛門（同名ですが書類を書いた藤右衛門とは別人）がキリシタンだったからなのです。

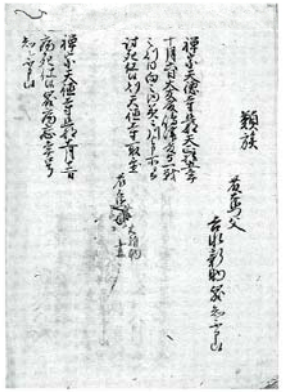
「書出」の１ページ目には祖父が天正６年（1578）にキリシタンとなり、慶長18年（1613）に転宗し、元和５年（1619）臼杵に転居、正保４年（1647）に76歳で病死したことが書かれています。そして、２ページ目から「類族」として、祖父の両親、子供、孫、曾孫16人の名前と宗旨が記載されています。ここにみえる「類族」とはキリシタンだった者の親族という意味です。

慶長17年（1612）幕府はキリスト教禁教令を出しました。この法令後、キリシタンは発覚すると捕らえられ、転宗を強要され、拒否すれば処刑されたのです。この嵐の中で生み出された弾圧の制度が必ず仏教寺院の檀家にさせる「寺請制度」とキリスト像などを踏ませる「絵踏」です。いずれもキリシタンではないことを証明させる制度です。そして、これらよりも遅れてできたのが「類族制度」でした。これは例え転宗してもキリシタンであった者の子孫を「類族」として監視下に置き、日常生活において一般人とは異なる制約を設けた仕組みです。この制度は貞享４年７月の幕府法令でほぼ定められました。「書出」の日付は貞享４年12月ですから、７月の幕府法令に基づいて作成されたのは間違いありません。

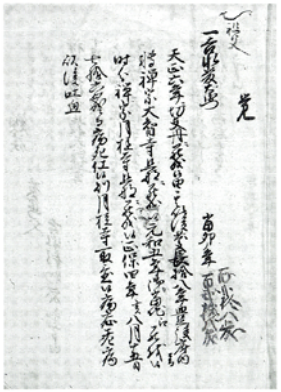
「類族」は直系では玄孫（やしゃご）にまで及びます。「書出」にみえる曾孫６人のうち２人の男子に出来たであろう子供まで「類族」とされたはずです。「書出」を書いた藤右衛門はキリシタンであった祖父が死亡したのが９歳のときですから、「類族」として特別扱いされる意味は実感できたでしょう。しかし、藤右衛門の子供や孫に至っては見たこともないのですから、理不尽な制度と思ったかもしれません。

「書出」の末尾には、「右の外忌み懸かる親類、承り伝えず候」とあります。幕府や藩にとって「類族」は「忌む」べき存在だったのです。しかし、身に覚えのない理由で「類族」とされ、特別視された人々にとっては苦痛だったに違いありません。

「書出」筆者藤右衛門の項



右上に「類族」とある



「書出」の冒頭部分

調査情報

岩御堂横穴墓

上野の台地とそこから西にのびる庄ノ原台地には、平野を見下ろす南側に多くの古墳が点在しています。岩御堂横穴墓もこの内の１つで、国指定史跡の千代丸古墳と餅田古墳群との間、賀来川左岸の丘陵崖面に掘り込まれています。横穴墓は砂岩質の地盤のため風化剥離が著しく、玄室だけが残っており全面が大きく開口しています。また、後世に玄室の奥への拡張と床面の掘り下げがなされており、現状で奥行4.2m・幅3.1m・高さ3.0mを測る空間になっています。現在、この中には家形石棺の棺蓋と20体ほどの石仏が安置されています。

玄室は、鴨居をもつ妻入り家形の構造をしています。天井部が一部崩落していますが、本来の規模は、奥行き3.1m・幅3.1m・高さ2.2m・鴨居までの高さ1.6mを測るものと推定され、平面正方形の家形に復元されます。こうした構造の横穴墓は、市内では飛山横穴墓群１号墓や県内でも６世紀にしばしば見ることができますが、他に比べて規模が大きく特異な存在と言えます。

この中には家形石棺の棺蓋が、玄室奥に拡幅され一段高くなった個所に裏返しで置かれています。石棺は凝灰岩製で、中央で割れていますが、長さ2.2m・幅1.1m・高さ約0.6mに復元できます。蓋の頂部には平坦面を持ちそこから四方に傾斜し、軒先が10cmほど出る屋根を持っています。棺蓋の裏側は、長さ1.8m・幅0.7mの範囲で15cmほどの深さに刳り抜かれています。石棺は均整に造られており、現状での遺存状況も良く、各稜線がはっきりとした非常に整美な家形をしています。市内にある家形石棺では、丑殿古墳・王ノ瀬天満社の家形石棺がよく知られていますが、これらの家形石棺に見られるような縄掛突起は見られず、また、蓋の頂部に平坦面をもつなど、石棺の構造的には新しい要素を持っていると考えられます。

この石棺は現在横穴墓と同じ所にありますが、横穴墓が造られた当初からこの中にあったかは不明です。横穴墓にこのような石棺が置かれる例はあまりなく、後世に別の場所から持ち込まれた可能性が考えられます。ただ、石棺の遺存状態が非常に良好であり、あまり動かした痕跡が認められない点で疑問がもたれます。しかも当地は崖に面しており、人がようやく歩ける程度の道しかなく、石棺を運び得たとは考えがたく、運んだとすればどうして運んだのか、また、棺身はどこに行ったのかなど、岩御堂横穴墓は多くの謎を秘めて、今も地元の方々により祀られています。

横穴墓の天井部

家形石棺のふた